

第6章 墓上施設の現在

山崎 亮

墓上施設とは一般に、石塔造立以前の埋葬地に設けられる種々の伝統的な構造物のことを指す。それらの墓上施設のなかでも屋形型の形状のものは、かつては、西日本の島嶼部や山間部を中心として広く分布していたが、火葬の普及とともに、減少の一途をたどっている。ところが、隠岐、壱岐、対馬には、このような屋形型の木造の墓上施設——これらの地域ではスヤと呼ばれる——が、今なお盛んに設けられているところがある。それらの地域では、スヤのなかに野位牌を安置して灯明を上げ、故人の好物を供えて、一周忌までは毎日のように参るといふ。とくに隠岐島前では、廃仏毀釈が激しかったこともあって、現在も仏式の葬儀と神葬祭が混在しており、また島前を構成する3島の各々で、土葬から火葬への移行過程が異なっている——西ノ島では1980年、中ノ島では1998年にそれぞれ火葬場が稼働し、これに対して知夫里島ではまだ火葬場は建設されていない——点でも興味深い事例を構成している。けれども、葬儀の神式・仏式の違いにも、また火葬と土葬との違いにも関わりなく、島前のいたるところで、スヤは設けられ続けているのである。

日本民俗学では、柳田国男以来、このような屋形型の墓上施設は、古代の喪屋の遺制、あるいは死者を現世から隔絶する装置の残存とみなされるのが一般的であるが、火葬への移行後も設けられ続けている島前や壱岐のスヤの場合、このような起源論的説明は説得力を欠く。島前のスヤに関しては、明治維新直後の神葬祭の手引き書である『隠岐国葬祭式』の頭注に、「素屋ト号スルハ設ルニ及ハス」とあるのが、管見の及ぶ限りでの文献上の初見である。この文言から推測するならば、少なくとも幕末には、仏式の葬儀に際してスヤを設けていたことは確実であろうが、しかしそれ以上時代を遡ることは困難である。ただ、明治初年の神葬祭への移行に際してスヤを廃止しようとする動きがあったにもかかわらず、生き永らえてきた伝統的な葬送習俗とみることはできるだろう。

ここで注目したいのは、近年、隠岐島前でも壱岐でも、スヤをできるだけ長く維持しようとする傾向が顕著になっているという点である。スヤは元来、土葬に際しての過渡的な墓標であり、通常は2、3年たてば自然と朽ち果て、代りに石塔を建てるはずのものであった。ところが最近では、朽ちかけたスヤを補修したり、ビニールシートをかぶせたりする例が目立ってきている。そもそもスヤの製造過程において、トタンで表装したり、上質の木材を使用するなどして、10年程度は朽ちないように頑丈に作るようになっている。このようなスヤの「延命化」現象は、むしろ、火葬にともなう「家墓」の普及に対応するものと思われる。各人の石塔が建てられなくなり、野位牌を安置する一種の祭壇としてのスヤが、まだ記憶に新しい身近な故人を個別に偲ぶよすがとして、いっそう必要とされている、と考えられるのである。もちろん島前にしても壱岐にしても、このようなスヤの需要を支える供給システムが、地元のJAや葬祭業者などによって確立されている点も見逃せないが、いずれにせよこれらの地域のスヤの事例は、伝統的な葬送習俗が、その機能の力点を変えつつ継続していく典型例とみなすことができる。

※隠岐、対馬、壱岐におけるスヤに関する詳細は、拙稿「墓上施設の現在——隠岐、対馬、壱岐におけるスヤをめぐる——」（島根県古代文化センター『古代文化』13、2005）を参照されたい。